

ないとう
内藤

めいせつ
鳴雪 (1847~1926)



俳人。江戸(現、東京都)の松山藩邸に、藩士・内藤房之進の長男として生まれる。幼名は助之進、後に素行と改める。松山藩の藩校・明教館と昌平黌で学んだ後、明治初期の県内の教育行政に携わり、小・中・師範学校の設立に尽力した。後に、文部省に転任するが強度の神経衰弱となったため退官し、東京で学ぶ松山出身の学生たちの寮である常盤会寄宿舎の監督となる。俳句は、その時に寄宿舎生であった正岡子規の感化ではじめ、古典の素養や漢詩の実作体験を通して、洒脱尚古(俗気がなく、昔風)な格調高い句を得意とした。

略歴

弘化4(1847)年4月15日	江戸の松山藩邸に、松山藩士・内藤房之進の長男として生まれる。
安政4(1857)年	父の帰郷とともに、松山に帰る。
文久3(1864)年	元服して師克を名乗り、藩命により明教館に寄宿し大原観山より漢学を学ぶ。
慶応元(1865)年	藩主の嗣子・松平定昭の小姓となる。
明治元(1868)年	京都に遊学
明治2(1869)年	東京に出て、昌平黌に学ぶ。
明治3(1870)年	藩政に参画。権少参事学校掛に任命され、藩校・明教館の刷新などを行う。
明治5(1872)年10月	学制頒布により、石鉄学区区取締役に就任
明治8(1875)年	県令・岩村高俊に抜擢され、愛媛県学務課長となる。
明治9(1876)年	松山に師範学校を設立。また、草間時福を招き、松山に愛媛県変則中学校を設立
明治13(1880)年7月	文部省に転任
明治22(1889)年	常盤会寄宿舎監督となり、正岡子規と知り合う。
明治24(1891)年4月	文部省を退官
明治40(1907)年	常盤会寄宿舎監督を秋山好古に譲り、俳句に専念する。
大正15(1926)年2月20日	東京府麻布(現、東京都港区)の自邸において80歳で永眠

(写真提供：松山市立子規記念博物館)

〈関連図書〉

- ・内藤鳴雪『俳句独習』 大学館 1903年
- ・内藤鳴雪『鳴雪俳話』 博文館 1907年
- ・内藤鳴雪『俳句作法』 博文館 1909年
- ・内藤鳴雪『鳴雪俳句集』 春秋社 1926年
- ・内藤鳴雪『鳴雪自叙伝』 青葉図書 1976年
- ・和田茂樹『愛媛文化双書36 子規と周辺の人々』 愛媛文化双書刊行会 1983年
- ・畠中淳『内藤鳴雪』 松山子規会 1985年
- ・愛媛子どものための伝記刊行会『愛媛子どものための伝記 第20巻 正岡子規・内藤鳴雪・柳原極堂』
愛媛県教育会 1989年
- ・『近代作家追悼文集成 第20巻』 ゆまに書房 1992年

〈主な収蔵資料〉…(P219, 104)

〈ゆかりのある場所〉…(P301, 151~152)